

数の季節

囚われの女たち

第十部

山 代 巴



径 書 房

囚われの女たち 第十部

数の季節

一九八六年八月十五日発行

定価 一九〇〇円

著者 © 山代巴

発行者 原田奈翁雄

発行所 株式会社 径（こみち）書房

東京都千代田区三崎町二一三十五影山ビル

電話 ○三―二三四―四六〇八

振替口座 東京 一―三二七二六

印刷 明和印刷株式会社

製本 株式会社 積信堂

0093-1010-2507

囚われの女たち 第十部
数の季節

山
代
巴

カ
バ
ー
絵
装
釘

山
口
泉
山
代
草
子

目次

臘梅と鬼のげし

7

夜半の味噌汁

58

小さい手の彼方

85

隠れたことづけ

109

数の季節

131

谷間の婚礼

158

死者の宿

192

谷間の揺籃

230

地藏の子ら

302

狂乱と無欲顔貌へ

355

数
の
季
節

臘梅と鬼のげし

一

その朝、図書婦たち二人が作業をはじめて一時間ぐらいたったとき、窓の外を何人かが工場の方から歩いて来る足音が聞こえた。返された本の点検をしていた五十七番がひよいと立って外をのぞき、

「未成年囚たちが掃除道具を持って教誨堂へ入って行くよ、何かあるんだろうか」

「どこから偉いさんが話しに来るのかも……」

「そうかもなあ」

そんな会話から一時間ぐらいたったとき、根元看守が「お早う」と扉を開けた。手には一メートル以上もある濃緑の葉の茂った藪椿の束を持っていて、

「これから教誨堂の花を生けんならんのだ。正月のときは五十七番に生けてもらうたさかい、今日は四百六番と生けようか」

教誨堂への渡り廊下に出て見ると、降りはじめたばかりの雪が、泥色の蓮池や、枯れた芝生の運動場の上に静かに落ちていた。

「今日見える偉いさんは、今朝になって大阪から電話をかけて来はって、正午から講演に行く言わはってん。そいでいま所長さん以下大あわてやねん。あんた笹川良一いう名前を聞いたことあるやろう？」

「いいえ、いま初めて聞きました」

「本館の部長さんの話だと、この方にも前には思想犯で大阪の北刑務所にいはったことあるんやと。百八十度転向しはって、ヒットラー総統の親友になりはって、いまは日本で並ぶ者なき国士やそうな」

教誨堂では未成年囚たち十人余りが掃除をすませたところだった。正月には正面の仏壇には枇杷の木や水仙が生けられ、講壇近くの大花瓶には松竹梅が生けてあつたが、いまは仏壇の前にも、講壇の横にも花がない。根元看守は未成年囚を戒護する看守に、

「花瓶の水、入れかえてくれはったん？」

「入れかえたよ、あんた大あわての忙しさやろう思うて」

「忙しい忙しい、あれからすぐに自転車に乗って家へ帰って花探しまん。一汗かいたよ」

「その藪椿、花が咲いてるな。よう咲いたのが見つかったな、どこにあつたん？」

「幡降^{はろうじ}寺山の日だまりや」

未成年囚や、未成年囚を戒護する看守は出て行き、光子は根元看守にさしずされながら仏壇の前の花瓶にも、講壇の横の花瓶にも藪椿を生けた。根元看守はさしずしながらも、

「笹川良一というお人はな、国粋大衆党いうのを創らहutteな、三年前の総選挙のときに大阪から立候補ははって、大政翼賛会の推薦なしで当選ははってん。事務所を大阪に持てはるよってに、今朝その事務所から電話で所長を呼び出して、『寸暇を惜しむ忙しいときやけど、万障くりあわせて懲役の女たちにも国家の一大事を訴えたいから、懲役を一堂に集めてくれ』言わはってん」

花を生け終えたとき光子は、残りの藪椿の下に、糞虫の巣がいくつもぶら下がっている枯枝のようなものがあるのに気づき、

「担当さん、これ何です？」

「ロウバイやねん」

光子は初めて聞く名前だったから、

「ロウバイ？ 老いた梅の意味ですか？」

「わても初めて聞いたときはそう思うたけど、わてのお花の先生の言わはるには、これは旧臘^{きふろう}に咲く梅の意味で、ロウの字は旧臘の臘の字を書くのや」

「旧臘って、旧暦の十二月の意味でしょう？」

「そうやねん、旧暦の十二月は新暦の一月、ちょうどいまごろのことや。臘梅はいまの季節に咲くのや」

蓑虫の巣のついた枯枝と一緒に、タンポポの葉とけしの葉をまぜたような、切れこみの深い柔らかな葉の間に、アザミの花に似た小さい黄色い花が一輪咲いている。根元看守は、

「これ、何いう花か知ってるか？」

「鬼のげしでしょうか？」

「そうやねん。いま、この刑務所の南に向いた高塀のきわに一株、元気よう咲いてるのや。わてなあ、あんたがこの花を見て、この花のように冬に強うなろう思うてくれたらええと思うて、切つて来たのや」

仏壇の花筒にも、講壇の横の大花瓶にも似合いそうにない蓑虫の巣の下がる枯枝と、野草の鬼のげしを眺めて光子は、

「どこへ生けるんですか、担当者？」

「その個人面接の小部屋の机の上に……」

教務課の専用ともいえる仏壇の横の、西向きの窓のある小部屋の机には、竹製の手さげの形をした焼きものの花瓶が置いてある。何焼きか光子にはわからないが、黄土色と緑色とがまざり合う風雅な感じで、生花を習う根元看守の私物だった。根元看守は臘梅と鬼のげしを持って小部屋へ入ると、

「これはまだ言うたらあかんのやけど、来週からわたの戒護であんたがする仕事は、この個人面接室を使うことになるらしいのや。そいで、この机の上に、あんたを元気づける花を生けたらう思うてな、藪椿をもらいに行ったついでに、幡降寺さんへ寄って臘梅をもうて来たのや」

根元看守は臘梅を形よく花瓶に入れようとして、糞虫の巢の下がる枝をためながら、

「わてのお花の先生の言わはるには、臘梅は後水尾天皇の御時に、朝鮮から渡って来たのやそうな。明治までには公卿さんの庭とか、由緒のある寺か茶室の庭にしかなかったそうな。幡降寺には昔、よほど花にくわしい和尚さんがいはったらしゅうて、臘梅の古木があるのや」、

「原産はどこでしょう？ 朝鮮かしら」

「原産地は支那やそうな。北京からもつと奥地の寒い地方に咲く臘梅はべっこう色で、細いきりつとした花びらで、花芯のところは濃い紫。まるで聖人^{せいじん}の目のように風雪の中で咲くのやそうな。暖かい蘇州あたりに咲く臘梅は、淡い黄色で、小娘の頬のようなふつくらした花びらで、下を向いて咲くそうな」

「幡降寺のはどちらでしょう？」

「聖人の目のように咲くべっこう色の方や」

生け終ると根元看守は腰掛けて、自分の生けた花を眺めながら、

「わてが幡降寺で花の仕度うして帰って見たら、教務の部屋へ、大阪の笹川代議士の事務所の方が、笹川先生とヒットラー総統が握手してはる写真だの、肩を組んで腰掛けてはる写真だの、ヒットラーユーゲントにかこまれてはる写真だのを持って来てはって、すぐに台紙に貼って、笹川先生がここへ到着されるまでに、工場の懲役ら全員に見せておいてくれ言うてはった。わては花を生けに戒護区域へ入らにやならんよって、桃谷さんが写真を台紙に貼ることになったのや。桃谷さんあの通り、うぶでつつましいさかい、どうしようどうしよう言うて、手ふるわせておろお

ろしてはったよ」

「おそれおいから？」

「そうやねん。本館では所長さん以下全員、まだ見ぬ先に、おそれおい言うて、おろおろしてはるのや。わて悪い奴や、いつも威張って肩いからせてはるお方らがおろおろしはる姿を見ると、おかしゆうて、おかしゆうて、つい笑いそうになつてしもうのや」

そう言いながら根元看守は、思い出したようくつくつ笑い、のちには机にうつ伏して吹き出して笑った。

二

昼食が終ると間もなく、工場の方から教誨堂へ向かう大勢の足音が光子の房へも聞こえてきた。工場の懲役たちは、笹川とヒットラーの親交をもの語る教科書の大きさをぐらいの写真は何枚も見せられ、普通では会うことのできない尊い人がわざわざ来てくださるのだから、非礼のないように謹んでお迎えし、謹んでお話を聞くようにと、戒護の部長から訓示を受けて教誨堂へ行くのだから、いつものようにがやがやの私語はない。足音までも謹んでいるかのように光子には聞こえた。雪は降ったり止んだり、まだ一センチも積ってはいない。工場の懲役たちが出揃うと、九津見や北林のような累進処遇令の除外者をのぞく全員が教誨堂へみちびかれた。光子は正月のときと同じように未成年囚のすぐ後の列に、雑役の十番や図書婦の五十七番と並んで腰かけた。戒護

の部長や看守はいつものような大声ではなく、唇に人さし指をあてて「静かにせよ、私語するな」を命令していた。もしこの無言の命令にそむいたら、あとで大変な罰が待っていることが懲役たちにもわかっているのか、場内はしんと静まっていた。

やがて所長の先導で笹川が教誨堂へ入って来た。彼は鼻の下にヒットラーと同じ形の髭をたくわえて、黒い背広に拍車のついた黒皮の長靴をはき、ヒットラーと同じように左手を前方斜め上にさし上げてカッカと音を立てて歩いた。光子は彼が自分らの列の横を通り過ぎたとき、ちらっと後姿を見た。彼は正面の仏壇へ向かって敬礼するとき、拍車をカチツと音を立てて揃えた。所長の案内する席は右側で、彼はそちらへ向くときも拍車を鳴らしてヒットラー式に歩き、パチツと拍車を鳴らせて席についた。

達磨^{だるま}さんの綽名で呼ばれるずんぐりの所長は、うやうやしく彼に一礼して壇へ上がり、

「今日ここにおいでくださいました笹川良一先生は、世界的にもその名を知られ、日本人の中で最も強く深く、ヒットラー總統に信頼される方です。国粹大衆党の党首として、第八十六議会再開を間近にひかえて、寸暇もなき御多忙の中を、人間の滓^{かみ}として、屑として、世の中から捨てられた女たちが收容されているこんな所へ、わざわざ国難を訴えに来てくださいました。こういうしあわせはまたとないことであります」

所長は感きわまった声になり、

「所長としての私は、手を置くところなきまでに感無量であります。皆さんも先生のお声を耳に入れることは一生に一度のありがたきしあわせと、謹んで拝聴してください……」

笹川は、よく新聞で見かけるヒットラーの写真と生き写しの顔をして、拍車を鳴らして壇に上がり、講演の机の前に来ると懲役の方を向いて拍車を鳴らして立ち止まり、前方にさしのべた手で、左から右へ、聴衆の頭上を撫でるようにゆるやかに動かしながら、

「おー、わが母よ、わが姉よ、わが妹よー」

米粒一つこぼれても笑いが止まらなくなる年齢の未成年囚たちは、久しく見たこともないこの芝居気たっぷりな、大げさな挨拶に吹き出しそうになるのだが、いま笑うと後で受ける罰がどんなものか前もって聞かされているから、じっと笑いをがまんしていた。

「私も若いとき、刑務所の独房に坐っていたことがあります。刑務所の寒さも、飢^うしさも身をもって知っております。今日のように雪の降る日、高いところの、うす明りの窓に向かつて、霜やけた手をさし上げて、お母さーん、母上ー、ご心配かけますー、お許しください。わたしは、私利私欲を求めてこんな所へ入ったではありません。わが大和民族が、どうしたら平和に豊かに生きられるかを探らんがために、学ばんがために行なったことで、ここに入られました。わかってくださいーいと泣きました……」

右側の窓を背にした位置には所長、副所長、看守長、部長と、戒護に関係する役人が位の順に並んで腰をかけ、左側の窓を背にした位置には、教務主任、教誨師、表の事務関係者と、偉い順に腰かけているが、その人々がみんな泣いている。ハンカチで眼鏡を拭いている人もいる。懲役も多くは泣いている。

「わたくしにこの日本の国が世界一美しく、なごやかで、住みよい国であることを目覚めさせて

くれたのは、大阪の北刑務所でした。皆さん、日本の国が緑したたる美しい国、春夏秋冬の花を持つ国であるのは、日本列島の位置するところが良いからだけではありません。この国が万世一系の天皇をいただき、陛下の御みいずが、世界に比類のない愛にみちたもので、民草が、革命という天下をひっくりかえすようなことを起こしたことがなく、外国から踏みじられたことがないから、緑したたる平和な国でいられるのです。

飛行機に乗って、ひとたび日本を出て、外国の上を飛んでみなさい。それは一目でわかります。わたくしは先年、ヒットラー総統に会うため飛行機に乗って、インドの上を飛びましたが、見おろすインドの広い広い大地は、褐色だったり黄色だったり。それは草木が茂らず、田畑の作物も育っていないからです。この原因は雨が降らないからだけでしょうか。そうではな—いっ！日本のように万世一系の天皇をいただいておらず、外国に攻め取られ、外国人のどん欲な搾取に働く氣力さえ奪い取られているからではないでしょうか……」

彼はインドだけではなく、ドイツにつくまでの空から見たいろんな国のこと、ヒットラーの偉大さなどを、とうとうと演説したが、光子にはその演説の内容よりも、その大げさな身振り手振りに開いた口が塞がらぬ思いだった。彼は聖戦の意味も説いた。真珠湾攻撃から、マニラで、シンガポールで、インドネシアで勝ち続ける日本軍に、日本人自身が自分らの国の軍隊がこんなに強かったのかと驚き、歓喜するときのことは、握りこぶしを突きあげたり、胸を叩いたり、まるで踊っているようにして話した。

「戦は前進^{いくさ}だけでは勝てない、転進もある」と、ガダルカナル島から、アッツ島から、キスカ島